
君は水の中で夢を見る

彗羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は水の中で夢を見る

【Nコード】

N7802H

【作者名】

彗羅

【あらすじ】

ある高校の生徒が残酷な事件に合う。その後も連鎖的に起こる事件。犯人は何者なのか？生徒の仕業か、それとも……ケイ達三人はその真実に近づく。そこに隠されていたのは……

ハジマリ

それはある事件がこの物語の始まりだった。

ある高校の女子生徒が帰り道に何者かに顔を何度も殴られると言う事件が起きた。

女子生徒は大沢ルイ（16）

高校の中で一番と言われていた美少女。だが、殴られた顔からは、美少女の面影は消えていた。

彼女の顔は整形でも治せないぐらいのひどい重症。

警察の話では、彼女は犯人の顔を見ていない。

犯人は彼女に顔を見せる隙を与えず、瞬時に顔を何回も力強く殴ったのだ。

この事件に、全国的女子生徒が震えた。

高校では大沢ルイの噂は途絶えることなく、教室、廊下、職員室まで続いていた。

一体誰？

怖いわ。早く犯人見つかってくれないかな？

大体の話では大沢ルイにも非はあった。

彼女は美少女と言うことで数多くの男性と付き合っていた。

女子にも人気はあったが、中には彼女に彼氏を取られたと言う声が多かった。

もしや女の犯行と思われたが、女が彼女の顔を力強く殴るだろうか。

警察は調べたが、犯人は見つからなかった。

だが、そこで大沢ルイに恨みを持っていると思われる人物が浮かんだ。

それはクラスメイトの山岡ミナコ（16）である。

彼女は大沢ルイ他、集団による陰湿ないじめを受けていた。

警察は一度取調べしたが、アリバイがあった。

彼女は事件当日風邪を引いて学校を休んでいたのだ。

それに周りの証言も強かった。

『山岡？あいつは暗いし、運動もだめだから犯人じゃないよ。』

『いつもトロイ。』

『ドジ。』

アリバイと証言で、山岡ミナコは容疑者からすぐ外された。

事件から、2週間経った。

「あれから2週間だね。」

「ああ。」

屋上で昼食を取る二人の男子生徒と一人の女子生徒。

「ケイのやきそばパン美味そうだな。一口くれ。」

「いやだよ。なんでおまえなんかに。」

「ちょっと2人とも聞いてる？」

山口ケイ、山崎ユウタ、小倉ミキの仲良し三人組である。

「なんだよミキ。」

「あの事件、大沢のことよ。」

「大沢か。アイツどうしてるんだ？」

「それがね……」

ミキは静かに言った。

「おかしくなったの。頭が。」

「え？」

「精神病かな？」

「そりゃあ、高校一番の美少女と言われた自分が、一気に最下位のブスになったからな。」

「犯人、まだ見つかっていないんだろ？」

「そうなのよ。早く捕まってくれないかな。」

「あ……」

突如ユウタが声を漏らした。

「どうした？」

「アイツ……ミナコだ。」

「え……」

指差す先を見ると、そこにはキヨロキヨロと周りの様子を見るミナコの姿があった。

「うあ。」

ミキが嫌そうな声を出す。
すると、ミナコは三人に近づいた。

「ケイ君。」

小さい声でケイの名を呼ぶ。

「なに？」

「大場先生が呼んでいたよ。」

「そう。」

素っ気無い返事をする。

ミナコは用件を伝えに来たのだろう。返事を聞くと、そのまま屋上から去ってしまった。

「ミナコって、本当に暗い子ね。」

「ああ、俺もちょっと・・・」

ミキとユウタは冷たい目で彼女を見ていたが、ケイは違った。

実はケイとミナコは幼馴染で、友達だったのだ。

だが、ミナコがいじめを受けているのを助けなかった。
怖かったのだ。

ミナコを庇い、自分がいじめられるのを・・・
自分はミナコを裏切った。それがケイの胸の中に罪悪感として生まれる。

だが、どうすることもできない。今更仲良くなるなんて無理なのだ。

幼馴染の関係は、もはや崩れた。

そして、一日が終わろうとしている。

もうすぐまた一週間が経つ。

そうすれば、誰も事件のことは言わなくなるだろう。

だが、生徒たちは再び事件が起こることを知る由もなかった。

第二の事件

ある朝の朝礼。

今日は担任の大場ではなく、別の先生だった。

「えー、担任の大場先生ですが・・・」

その口から語られたのは、驚きのものだった。

大場は自宅のマンションで何者かに階段から突き落とされたのだ。その後、気絶している間に見知らぬ所に連れていかれ、金属バットのような硬い物に何度も叩かれた。

目隠しをされていたので、犯人の顔がわからなかったのだそうだ。

「うそ・・・」

ケイは青ざめた。

生徒たちみんなもざわつく。

あの事件から起こったもうひとつの事件。
同一犯の仕業だろうか。

「また起こったね。」

「ああ。」

ミキの顔は恐怖に染まっていた。

「同じ犯人か？」

「知らないわよ。」

「でもこれ以上は悪いこと起こらないさ。」

「だいいけど・・・」

一方、ケイは二つの事件にあるひっかかりを持っていた。それは、ミナコだ。なぜか彼女だけがひっかかる。

放課後、ケイはミナコを呼んだ。

「なに？」

「ちょっと話したいことがあってね。」

話しかけるのは気まずかったが、ひっかかりをどうにかするのが先だ。

ミナコを屋上に連れて、向かい合う。

「ケイ君。話って何？」

「いや、事件のことだよ。」

「事件？大沢さんと大場先生？」

「うん。」

「……私のこと疑っているの？」

「残念だけど、そうなんだ。」

「……」

ミナコは悲しそうな顔を浮かべていた。

「確かに、私は大沢さんにいじめられていたよ。でも、私当日は風邪引いてたし、それに大場先生と私はなにもないから。」

「……」

「怪しいと思うけど、私じゃないの。」

「……わかった。」

なぜだろうか。

すぐひっかかりは消えた。彼女は犯人ではない。

彼女が風邪を引いて犯行を及ぶことはできないことを知っていた。

大場の関連がないこともわかっていた。

だが、一体なぜ自分は彼女を疑ったのだろうか。

「信じてくれる……かな？」

「……うん。」

ケイが頷くと、彼女は安心したのか、笑った。

綺麗な笑顔だった。

もう少し彼女が明るければ、きっと男子にモテていただろう。

『ミナコが来たよ。』

『来たの？うわあ。』

『トイレに呼び出して水かけてやりましょうよ。』

ミナコが来る度に企んでいた大沢達。

彼女が明るければ、どうなっていただろう。

ケイはミナコにさよならと言って、その場を去る。
ミナコはただ見ているだけだった。

だが、ケイは気付かなかった。
一瞬、彼女の顔が歪んだのを。

連鎖

大場の事件から約二週間が経とうとしている。
未だに恐怖が消えないこの高校は、周りからも問題高と思われる様になった。

早朝、陸上部の阿部タイチが朝練のために学校に来ていた。
後輩も顧問もまだ来ていない。彼は準備を始めた。

「めんどくせ。」

彼は陸上部のエースであった。

次の大会で優勝すれば、大学進学が決まる。

・
大学進学が決まれば勉強しなくていいと言うのが、彼の目的だが・

ザッ

バックを置こうとした時、

ガッ！

「!？」

何者かに後ろから羽交い絞めされ、身動きが取れなくなった。

「放せ！この・・・」

タイチは抵抗するも、口に布を宛がわれ、眠ってしまった。
布には薬が染み込まれていたのだ。

おとなしくなったのを見てその者は彼をしげみに運ぶ。

「・・・クソヤローが。」

その者はタイチの腹を思いっきり蹴り、
ナイフを取り出した。

「うあああああああああああ!!」

三十分後、しげみから男の悲鳴が上がった。

「なんだ!?!」

着いたばかりの顧問が悲鳴を聞いて駆けつける。
しげみに入ると、タイチがいた。

「阿部! どうしたんだ!?!」

「先生・・・足が・・・俺の足が・・・」

「見せてみる・・・なんだこれは!」

顧問は足を見て驚いた。

彼の右足は、ズタズタにナイフのような物で切り裂かれていた。

三度目の事件。

高校はまた恐怖に支配された。

阿部タイチは救急車に運ばれ、警察は現場検証を行った。
が、証拠と見られるものはなかった。

だが、阿部タイチの悲劇は、まだあった。

「嘘だ・・・」

病院で診査を受け、医師の言葉に阿部は泣きそうな声で言う。

「足を切断するって・・・嘘ですよね・・・」

「残念ながら、あなたの右足はもう使えないのです。
このままでは壊死し、命に関わります。」

「そんな・・・陸上は？」

「・・・諦めたほうがよろしいかと。」

「いやだ・・・」

「いやだあああああああ！！！」

その後、阿部タイチがどうなったか学校でも知らされた。

足を切断し、大学進学の夢を壊された彼は、あまりの絶望感に怒り狂い、泣き叫び、精神に異常を起こした。

退院したら、彼は精神病棟へ入院することになった。

今度の事件は、人の夢までもを壊した。

近づく時・・・

阿部タイチの事件から三週間経とうとしている。

不気味なくらい、何も事件が起きなかった。

だが、学校の不穏な空気は未だに続いていた。

生徒たちの中で、犯人はこの学校の者ではないかという思考が生まれていた。

こいつが犯人ではないか、あいつが犯人ではないか、

仲のいい親友同士や、グループさえも、お互いを不信に思っていた。

そのことでケンカは何回か勃発していた。

「もういや。なんでこんな嫌なことが続くのよ。」

ミキは学校で起こるケンカにかなりまいていた。

それはケイもユウタも同じだ。

「もうたくさんよ！」

ミキは大声を上げて、立ち上がる。

「ミキ！」

「絶対ミナコが犯人よ！だってみんなミナコと関わりを持っていたでしょ！」

いじめを受けたから仕返ししたのよ！私あいつに会って聞いてくる

わ！」

「やめろミキ！ミナコが犯人だと断定するのはまだ・・・」

「他にいるの！？絶対あいつよ！！」

「落ち着けミキ。」

ケイはミキの肩に手を置いて、落ち着かせる。

「・・・なあ、ケイ。」

ユウタがケイを見つめ、言った。

「なんでお前はミナコを庇うんだ？」

「え？」

「だっておかしいだろ。あいつを庇うなんてケイくらいだぜ？」

「そ、そうよ。もしかして、ケイはミナコのが好きだったりするの！？」

「違うよ。」

ケイは否定する。

「・・・このさいだ。二人に本当のこと話すよ。
俺はミナコとは幼馴染で、友達だった。」

「え・・・」

二人は揃って声を漏らす。

「でも、俺はいじめられてるミナコを助けなかった。
怖かったんだ。庇って、俺がいじめられるのを・・・
俺は・・・ミナコを裏切った。」

「ケイ・・・」

「馬鹿げてるかもしれないけど、少しぐらいは庇いたいんだ。」

「・・・」

二人は黙った。

ケイの気持ちを、理解できた。

「ごめん・・・ケイ。」

「いいよ。」

ケイは笑った。

放課後、ケイは階段を降りていた。
職員室に来说う放送があったからだ。

「それにしても……」

犯人は一体どうしているのだろう。

こんなに長くなにもない時間が続くのは、どうも奇妙だ。
もしや、新たな標的を探しているのだろうか。

そう考えながら、次の階段を降りかかった……その時。

「えっ」

体が宙に浮いた。しかも、ものすごい強い力に押されて……

このままでは、踊り場に落ちてしまう。

そうすれば、死にはしないが、大怪我をしてしまう。

ふに、笑い声が聞こえた。

まさか犯人？

ケイは落ちていく瞬間がスローに見えた。

笑い声は未だに聞こえる。

それは、高くもなければ低くもない中間あたりの声。

男か女か断定できない。

(もうダメだ……)

そう思い、目をつぶったその時。

「ケイ！」

目の前にユウタがいた。

ユウタはすばやくケイを受け止め、そのまま倒れる。

おかげで、怪我はしなくて済んだ。

「ケイ！大丈夫！？」

ミキも心配そうに見る。

同時に、チツと舌打ちが聞こえた。

階段を見ると、そこに人の姿はない。

代わりに、階段を駆け上っていく音がした。

「待ちやがれ！！」

ユウタは追いかけた。

ミキもそれに続く。

ケイもなんとか立ち上がって二人の後を追った。

犯人

ケイを階段から突き落とした犯人は屋上に向かったらしい。
上から上がる音が聞こえる。

「屋上に行く気よ！」

「馬鹿が、屋上が行き止まりだってことわかんねーのかよ。」

これでは犯人が不利だろう。

それにしても・・・

犯人はなぜ、ケイを狙ったのだろう。

彼は誰かに恨まれるようなこととしていなし、事件の関与もない。

なら、なぜ？

バァン！

三人は屋上に出た。

屋上には犯人と三人以外、誰もいなかった。

三人は犯人を見た。

背中を三人に向けているその姿は、小柄で、スカート、黒髪。

「え・・・」

ケイはそれが誰だかわかった。

「おい！なんでケイを突き落としたんだ！」

ユウタが叫ぶと同時に、犯人は三人と向き合った。

「！」

「あんた……」

「……ミナコ……」

それはミナコだった。

ミナコは無表情に三人を見つめていた。

「おまえだったのか！」

ユウタは怒り、彼女に近づく。

「……」

「黙ってないで、なんか言えよ！」

ユウタはミナコの腕を掴んだ。

同時に、ミナコの顔が瞬時に怒りの形相に変わった。

「汚え手で触るんじゃないっ！」

腕を突き放し、ユウタを投げ飛ばした。

「うあ！」

「ユウタ!!」

女が出せるような力ではない。
どうということだ?

「ミナコ何をするのよ!!」

「何を? そいつが汚え手で触ってきたから投げ飛ばしたただけだ。」

ミキの問いを嘲笑うかのようにミナコは言った。

「それと、ミナコの名前を気安く呼ぶなよ。ブスの分際で。」

「な!」

おかしい。

こんなの、ミナコじゃない。

そう思ったとき、ケイの脳裏にある単語が浮かぶ。

『二重人格』

「……お前は誰だ?」

ケイはミナコ……裏人格を睨む。

「誰? この通りミナコだけど?」

「違う。俺の知ってるミナコはそんな口調じゃない。」

くくくと喉を為らして笑う。

「ああ、仕方ねえ。俺はミナトって言うんだ。たった今付けた。」
彼はミナトと名乗った。

「ミナト・・・お前はいつからミナコの中に？」

「生まれた時から一緒だ。」

「・・・なんで俺を突き落とした。」

「突き落とした？ちげーよ。あれは制裁だ。」

「制裁・・・だと？」

「ああ。」

「なんで・・・」

「なんで？まさか忘れたとは言わせねーよ。ミナコを裏切り、傷つけたことをな！！」

ミナトの形相が変わる。だが、すぐに戻った。

「え・・・」

「テメェはミナコをいじめから庇おうとせず、逃げたのさ。それが、どれだけミナコの心を傷つけたことか。」

ミナトはケイを睨む。

その睨む目からは怒りと憎しみが込みあがっていた。

「それで・・・俺を階段から？」

「当たり前だろ。テメエ以外階段に落とすにふさわしい制裁を持つ奴はいない。」

「待ってくれ・・・つまりそれって・・・！」

これで全て整理できた。

ミナコ、いじめ、自分・・・

これが関わっていると言う事は・・・

「・・・まさか・・・大沢の事件もお前の仕業なのか？」

「ええ！」

「ケイ！」

ユウタとミキが声を漏らす。

それに対し、ミナトは冷たく言った。

「ああ。そうだぜ？厚化粧ブスもクソランナーもあの偽善センコーも。」

「!？」

これでわかった。

犯人はミナトであること、その動機がミナコのいじめであることも・

•
•
•

純粹な狂気（前書き）

純粹な狂気

ケイはわからなかった。

なぜ裏人格の存在であるミナトが多くの残酷な事件を起こしたのか。

「ミナコをいじめていたからって、これはひどすぎる。」

「ひどい？ あれがか？」

ミナトは笑った。

「あれのなにがひどい？ 丁度いいじゃねーか。」

反省の顔もなければ、謝罪もない。

なんて残酷な人格だろう。

「お前・・・それ本気で言ってるのか？」

「ああ。」

「あんた最低！！」

ミキが叫んだ。

「人の将来や大事なものを奪ったのよ！！ それなのに・・・」

すると、ミナトの顔が瞬時に怒りの顔に変わった。

「将来？大事な？そんなの、あいつらが持つ資格はねえ！！」

ミキは怒声を聞いて、ユウタの後ろに隠れる。

「大沢の顔、阿部の足、大場の家族を奪っても、あいつらには自業自得だ。」

ケイは目を見開く。

「大場の家族って……。」

「ああ、知らないよなお前等は。あの事件の後、大場がどうなったか。」

ミナトは笑いながら言い続ける。

「あいつには妻と中学一年の娘がいるんだよ。こう聞くと幸せそうだよ。」

でも違う。大場はこの学校の三年のある女子と関係を持っていたんだよ。

俺はそれを写真で撮って、奥さんに送ってやった。」

三人は驚いた。

いつも温和で人気のあった大場先生がそんな事をしていたとは。

「そしたら予想通り、夫婦喧嘩して離婚しちゃった。最高のエンドだと思わないか？」

すると、ミナトは思い出していたのか、大きく笑った。

同時に、ケイにある疑問が浮かんだ。

ミナコのいじめと大場はなんも関連がない。
なのに、なぜミナトは大場までを……。

「ミナト、なぜいじめに関連がない大場先生を……」

「バーカ。関係あったさ。」

「え……。」

ケイは驚く。

すると、ミキが……。

「あんた、ミナコに頼まれてやったんでしょ？ そうに違うわ！
すぐにあの子を出してよ！！」

ミキは訳のわからないこと続きで、大場の話から反れた質問をミナトに問いかけてしまった。

ケイはしまったと、心の中で呟く。

そんなこと言えばミナトがまた怒り出すと思ったのだ。
だが……

「……………」

ミナトは黙ったままだった。

何も言わず、ただ空ろな目でなにかを見ていた。

「…………ミナト？」

様子がおかしい。さっきまで狂気の笑いを上げていた彼が、突然黙りだしてしまったのだから。

「あはははははは。」

突然、ミナトが笑い出した。

だが、それに狂気はなく、乾いた笑いが出ていた。

[illegible]

乾いた笑いは笑う中で狂氣に変わった。

三人はその光景は見て、狂ってる、としか思えなかった。

「はははははは！ 出せるもんなら出してやりたいさ！！！」

笑い声の後に響く悲しい声。

ミナトは笑いながら、目から涙を流していた。

「待ってくれ……出せるもんならって……。」

「ミナコは……ミナコは……もう、この世にはいない!!」

「え
・
・
・
○」

ケイは目を見開く。

この世にはいないって、
どういう事だ？

現にミナトの体はミナコものだ。存在している肉体。それなのに、この世にはいない？

「ミナコは、ミナコは今までいじめに耐えてきた!!
誰も憎まず、負けないで、ずっと! ずっと頑張ってきたんだ!!
でも、限界が来て耐え切れなくなったミナコは、大場に助けを求め
た!!」

助けてって!・・・なのに・・・なのにい!!!!」

ミナトはもはや情緒不安定だった。

泣きながら、笑っている。

「あのクソ担任は、面倒だからってミナコの助けを無視したんだ!!
それでもミナコは必死に助けてって、助けてって・・・でも動かな
いあの野郎は
何度も助けを求めたミナコにこう言ったんだ!! いじめから逃げた
いのなら転校しろってな!!」

三人はなにも言えなかった。

ミナコの悲しさと、ミナトの怒りが含まれたその言葉に・・・。

「誰も助けてくれない、そう思ったミナコは生きる希望を失くして
・・・それで・・・それで・・・。」

「・・・それで、ミナコは?」

「・・・自分で、自分の人格を壊した。」

「!?!」

「人格を壊すことは、死そのものだ。ミナコは・・・死んだ。いや
殺されたんだ。」

あいつらが・・・あいつらがミナコを殺した!!」

「ミナト・・・。」

「だから俺はあいつらの大事なもんを奪った！！俺の大事なものを奪った罰だ！！」

ミナコが死んで、あいつらだけが幸せになるなんて、そんなの俺が許さねえ！！」

ケイはなぜか悲しくなって、何も言えなかった。

彼は・・・ミナトは・・・ミナコが好きだったのかもしれない。

人格という存在で、あまり感情を知らない彼が、愛と言うものを自覚し、その愛のありすぎた結果が、この残酷な事件を生んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7802h/>

君は水の中で夢を見る

2010年10月10日06時08分発行